

相馬思う姿 A I で復活

遺志継いだ男性映像制作

東日本大震災直後の相馬市の医療現場を舞台にした演劇「HIKOBANE」を制作し、公演期間中に56歳で亡くなった俳優・映画監督の塩屋俊さんをイラストでよみがえらせた映像作品が今月、完成した。相馬市にライブハウスをつくりたいという塩屋さんの遺志を引き継いだ知人の男性が、十三回忌に合わせて「監督の思い出を何かの形に残したい」と制作した。(葉袋大輝)

■13年に死去
塩屋さんは自身の映画作品を相馬市で上映したのをきっかけに、2010年頃から伝統行事「相馬野馬追」を題材にしたドキュメンタリー映画の制作に着手した。だが、翌年の震災で制作は中断に追い込まれた。

俳優・映画監督 塩屋俊さん

その一方で、新たに手がけたのが舞台作品の「HIKOBANE」だった。震災と原発事故の混乱の中、病院にとどまり、患者の治療にあたった医師や看護師の姿を描いた。全国各地や米ニューヨークでも上演して評判を呼んだが、13年6月、

その上演のために訪れていた仙台市の薬屋で倒れ、帰らぬ人となった。

■人集う場を

生前の塩屋さんが願っていたのが、「震災で傷ついた相馬市に人が集まる場所を」とライブハウスをつくることだった。その遺志を引き継いだのが、相馬市に通い詰めた塩屋さんと親交を深めた同市の建設会社社長、青田由広さん(70)だ



塩屋さんの遺志を継いで開いた「音屋ホール」で演奏する青田さん(6月28日、相馬市で)

った。

塩屋さんが亡くなってから3年後の16年、市内にライブハウス「音屋ホール」をつくった。被災地を音楽で盛り上げようと、俳優の松たか子さんら著名なアーティストも公演をしてきた。定期的にイベントが開かれるようになり、相馬ににぎわいをもたらしている。その光景に、青田さんは「もし生きていたら、どんな活躍をしていたか想像

で見てみたい」と思った。知人のつてで知り合った都内で映像制作会社を手がける高塩博幸さん(63)に今年6月、映像制作を依頼し、約4分の映像が完成した。塩屋さんが死後の世界から相馬市に降り立ち、「HIKOBANE」の特別編を音屋ホールで一夜限り上演するストーリー。生成AI(人工知能)を使って塩屋さんの登場人物をイラストにして動かす形の映像で、高塩さんは「大切な人の生前を想像する余白が生まれる。塩屋さんの相馬への思いも伝われば」と語る。

■思い出が形に

青田さんは「塩屋監督は、舞台作品を通じて震災後の相馬の人たちの心を癒やしてくれただけでなく、相馬の地に色んな人の集まる場所が生まれるきっかけももってくれた」としのぶ。映像は来年、音屋ホールが10周年を迎えるのに合わせてファンに披露することも検討する。塩屋さんの妻にも映像を届ける予定で、青田さんは「被災地の相馬と塩屋監督の思い出が形に残せて良かった」と話した。

いわき・江
港町の魅力

いわき市の江
日、「江名の町マ
ステイバル」が開
江名地区に興味を
らい移住などに
つけにしよう
活性化に取り組
町再生プロジェク
ンバーが主催した
この日は、来場
マを炭火で焼いて
らう企画や、遊漁
て港一帯を巡って
験乗船が行われた
ジでは歌やダンス
れ、市内外から訪
飲食をしながら鑑
南相馬市の小学
奏心君(8)は「船
のが楽しかった」
った。

サンマの炭火焼き
来場者(14日、い

映像に登場する塩屋さん。相馬市の「音屋ホール」で公演の準備をする場面が描かれた(ブルーオーシャンスタジオ提供)

